# 原田敏明毎文舎文庫写真資料の
# 位置情報に関するGIS分析試論

板　井　正　斉

# 原田敏明毎文舎文庫写真資料の位置情報に関するGIS分析試論

板　井　正　斉

## はじめに

皇學館大学における宗教学および民俗学の学問的つながりを振り返る際、最も大きな影響を与えた人物の一人は原田敏明（明治26（1893）年～昭和58（1983）年）であろう。令和４（2022）年で、生誕129年、没後39年を迎える。「日本の代表的な宗教学者」「昭和時代の日本宗教史学者」等と評される原田は、大正３（1914）年に神宮皇學館本科へ入学し、大正８（1919）年に卒業（第28回）する[1)]。同年に東京帝国大学文学部宗教学宗教史学科専科へ入学し、昭和２(1927)年に卒業。その後、昭和11（1936）年に神宮皇學館講師として本学へ着任すると、昭和15（1940）年に神道研究室を開設し、同年の神宮皇學館大学昇格に伴う文部省との折衝にも尽力した。戦後は昭和40（1965）年より11年間に渡り非常勤講師を務めている。この間に薫陶を受けた本学関係者は枚挙に暇ないが、西川順土、櫻井勝之進をはじめ、原田の一連の研究資料等をまとめた牟禮仁、櫻井治男などがいる。「原田学」とも称される研究成果は、著書約13冊、論文類約230点におよぶ。それとともに、逝去後、ご遺族より本学へ寄贈された「神道研究所原田敏明毎文舎文庫」は、原田学形成の過程をうかがえる大変貴重な資料群である。文庫は、図書・研究調査収集資料・草稿類・写真・テープ・その他で構成されており、それぞれ神道研究所より『原田敏明先生旧蔵　毎文舎文庫目録』（平成８（1996）年）、『原田敏明毎文舎文庫蔵書目録』（平成16（2004）年）、『原田敏明毎文舎文庫写真目録（以下、『写真目録』）』（平成16（2004）年）、「原田敏明毎文舎文庫研究調査資料目録[2)]」（平成16（2004）年）、『原田敏明毎文舎文庫写真資料目録（以下、『写真資料目録』）』（平成19（2007）年）が作成されている。

そこで本稿では、これら原田学の総体的諸資料群を活用した新たな[3]分析視点の設定を目的とする。具体的には、毎文舎文庫のうち、位置情報を含む『写真目録』と『写真資料目録』を取り上げ、これまでの先行研究を整理した上で、近年、人文学においても注目されているGIS（地理情報システム：Geographic Information System）を用いた分析を試みる。なお、本稿では分析対象を三重県に限定した試論にとどめ、手法の有効性を検証する。

さて、筆者が原田を最初に知ったのは、祖父である板井清直[4]の本棚であった。祖父は神宮皇學館普通科を昭和７（1932）年に卒業しているので、原田と直接の関係はなかったが、現在筆者の研究室にある原田の著書のほとんどは祖父の蔵書である。また、父清明は、再興された皇學館大学の第一期生として、昭和41（1966）年に卒業している。ちょうど原田が戦後再び皇學館大学で教鞭をとった昭和40（1965）年度の集中講義（日本宗教史[5]）を受けていたと思われる。その後、筆者は大学院時代に、前述の毎文舎文庫の蔵書整理や目録作成の一部に関わらせていただいた。その頃、先に紹介した諸先生方より折に触れて原田の学説を拝聴する機会を得た。さらには、平成13（2001）年にドイツ・ボン大学での在外研究時、原田と研究交流の深かったヨーゼフ・クライナーより、直接お話しをお聞きできたことも忘れられない経験である[6]。それらの成果を自身の研究として十分に反映できていないが、ご縁のあるごとに小発表をしてきた[7]。本稿では、以上のような経緯と学恩に感謝しつつ、毎文舎文庫の膨大な資料への新たなアプローチを考えたい。

## １．原田敏明と研究成果

あらためて原田の略歴と、研究成果・評価をまとめる。とはいえ、既に略歴などは直接の関係をもってきた諸先生方による丁寧な著述が多くある。ここではそれらを参照した上で簡潔に記しておく[8][9]。

明治26（1893）年11月１日に熊本県鹿本郡に生まれた原田は、前述の通り神宮皇學館本科を経て、昭和２（1927）年に東京帝国大学文学部宗教学宗教史学科本科を卒業。在学中は、姉崎正治の下で「ヘブライの宗教意識の発達」を研

究テーマとした。その後、九州帝国大学講師（昭和5～6年）、東京帝国大学講師（昭和8～16年）等を歴任し、昭和11（1936）年に神宮皇學館へ赴任。同年に高松宮家より有栖川宮記念奨学金を受け、その後もたびたび受託する。この時のテーマは「本邦農耕儀礼の宗教民族学的研究」で宇野円空、古野清人との共同研究であった。神宮皇學館では、昭和13（1938）年に教授となると、同14（1939）年に神道研究室を開設し、岡田米夫、池山聰助らとともに『神道研究』（同15～18年）を発刊した。伊勢を含めた畿内の祭礼行事実態調査や資料収集はこの時期に始めたといわれる。昭和15（1940）年、神宮皇學館が大学に昇格すると教授に就任するが、間もなく終戦による廃校を迎え、生地の熊本へ帰る。戦後は熊本大学法文学部教授となり『熊本県の歴史』を監修する等、地域研究の向上に関心を払う。また、昭和31（1956）年に自身が主宰して「社会と伝承の会」を設立。『社会と伝承』を発刊（昭和31～52年）し、800余名の会員を擁して全国的に地域社会での研究成果を収載する。昭和34（1959）年からは東海大学文学部教授を務め、昭和49（1974）年に定年退職する間、昭和40（1965）年から51（1976）年まで再び皇學館大学で非常勤講師として日本宗教史を担当した。昭和58（1983）年1月、享年91歳で亡くなるまでの晩年は主に西日本の宮座祭祀について研究を深めながら、それまでに発表した論考230点から『宗教と民俗（昭和45（1970）年）』『宗教と社会（昭和47（1972）年）』『村の祭祀（昭和50（1975）年）』『村祭と座（昭和51（1976）年）』『村の祭と聖なるもの（昭和55（1980）年）』を刊行し、いわゆる「原田学」が集大成されていく。また昭和40（1965）年以降、神社の祭礼行事の古文献をまとめた『日本祭礼行事集成』10巻も監修している。「原田敏明著述目録[10]」によると、著書13、編著・監修13、訳書1、そのほか論文類230点余り、辞典項目100余りとなる。

原田の研究成果に対する評価は高く、その領域は宗教学・宗教社会学のみならず民俗学にまでわたる。代表的な評価について、生前未刊行の元原稿をまとめた原田敏明『宗教　神　祭』（岩田書院、平成16（2004）年）の「第二編　原田学研究」に収められた論説を参照しながら整理する[11]。

宗教社会学者の石井研士は、原田の研究対象に対する関心を論文の発表年代から大きく2つに整理している。一つは、文献を中心とした「「未開」や「古代」

への関心」であり、もう一つは現地調査にもとづく「自らの調査による「村」とその「宗教」への関心」である。この研究対象の変化時期は、昭和12年と推定でき、全体を通じて後者の論文数が圧倒的に多い事実を指摘する。しかしながら、対象の変化に対して問題関心は終始一貫しており、あくまでも「社会と宗教の関係」理解であり、その「社会と宗教との捉え方」にあるとする。そこに石井は宗教の社会的統合を定義したデュルケムの影響を指摘している[12)]。

デュルケムによる宗教社会学の命題を原田は、具体的に日本の村で実証を試みるわけだが、その視点は民俗学とも重なる。『日本の意識』を著した住谷一彦は、「原田敏明先生の宗教学（以下原田学、あるいは原田理論と略す）は、日本民族＝文化複合の自己認識の学である」として、柳田国男の民俗学との対比を指摘する。その上で「両者はいずれもその分析のキイワードを日本人の固有信仰に求め、その基盤を日本農村の性格に見出している点でも共通している。しかし、まさにその点で両者は対極をなす」とする[13)]。すなわち原田学は、「いわゆる古俗は辺境に残るという「周圏論」的な視点ではなく、むしろ文化の古くから発達した文化中心地に累積された文化層の厚みを解析することが重要であるという方法ないし視覚に裏打ちされて[14)]」おり、それを「文化のすり鉢型」理論と評する。

「文化のすり鉢型」理論を裏付けるように原田は、伊勢とともに大和・山城・近江地方の各大社をはじめ村落共同体の祭礼組織・祭祀組織に関する研究を通じて日本人の神観念、宗教性および日本社会の意識構造について独自の論を展開した。その中でも、特徴的な成果の一つに「オハケ」に関する論考がある。オハケとは、『日本民俗大辞典』によると、「近畿を中心に中国・北陸にかけて祭礼の折、当家の家に立てる標示物[15)]」とあり、参考文献に原田の『村の祭と聖なるもの』があげられている。当番や神主の屋敷、またその戸口に御幣を立てて祀るオハケの解釈は、原田が現地調査を始めた昭和10年代当時、その実態調査がまだ十分でなかった。原田は度会郡御薗村高向および浜郷村通（ともに現三重県伊勢市）での調査を通じて関心を持ち、文献と実地調査による事例の収集に努めるようになる。その一部は「「オハケ」探訪記[16)]」や「「オハケ」奉斎の形式とその変遷[17)]」等だが、その後、生前最後の著書となった『村の祭と

聖なるもの』にそれぞれ再録されている。

最も端的にまとめられた成果として、昭和47（1972）年に出版された『日本民俗事典』の項目執筆がある。以下に引用する。

古例の祭礼では、当番や神主の屋敷、またその戸口に御幣を立てて祀ることが多い。その名称はいろいろあるが、「おはけ」というのもその一つである。大体似た名称が東は秋田や茨城まで、西は四国、中国から九州にまで分布している。しかし「おはけ」の語意は明らかでなく、地方によっては「ぱっかい」とか「はけおろし」などあって、もともとは「はけ」である。通俗には四手を付けた幣から白幣といい、入口や門口に立てられるために祓禊といい、また秋の祭礼に用いられるために初頒というなど、種々に解するが、未だ明らかではない。形式も幣串、特に葉付きの竹に藁ぼてを付け、それに小幣を刺したもの、多くの場合に榊の枝に四手を付けたものをそれに添える。葉付きの竹は大きなものを用い、神が天から降りてくると説明し、天空に聳えるようなものがある。それを盛芝や盛土の土壇に立て、そこにまた数本の小幣を刺すところが多い。

「おはけ」といわなくても、これに近いものは全国的に種々に存する。もともと神霊を御幣に祀り、祭礼に当って神社に渡御、そこで祭典が行なわれたのであるが、神霊が神社に常在することになると、当屋や神主の屋敷に立てる御幣は、神社から分霊を迎えたものとなる。また祭礼に当って当屋や神主の屋敷に祀るので、「おはけ」は神の分霊を祀ったものとなる。

要するに「おはけ」は神霊奉斎の御幣にほかならないが、ただ「おはけ」という場合は必ず氏神の祭礼に限っている。これは「おはけ」という語の古いこと、それを用いる氏神が古く、かつ種々の神社と異なる特別のものであることを示す。しかし二つの例外、伊勢講と浅間講との場合がある。伊勢の民衆信仰はすでに古く、地域的な講を組み、参拝に旅立つ場合に、当人宅または氏神の境内に「おはけ」を奉斎し、旅中および参詣の無事を祈った。浅間講は富士信仰とともに栄え、分霊を村に奉斎して「おはけ」を建て、山を築いて浅間神を祀った。[18)]

『村の祭と聖なるもの』には、「神宮文庫にある『郷々諸祭礼式目』というのを見ると、その近在には、どの村でも昔は必ずあったものであることが判った。そうしたことから全国的に事例を求めて、案外沢山の数に上り、その上、それが村の行事には、重要な位置を占めるものであることに気附いた。それにも拘らず、これまであまり問題にされなさすぎたことにも驚いた[19]」と記しており、伊勢での調査と記録資料が研究契機であったことを述べている。

## ２．皇學館大学神道研究所原田敏明毎文舎文庫

発表あるいは刊行された原田の研究成果とともに、原田学形成の過程をうかがえる資料群として、「神道研究所原田敏明毎文舎文庫」がある。

経緯と内容について、各目録および、『宗教　神　祭』の「編集後記－出版の経緯－」を参照しながらまとめる。なお、いずれの執筆も一連の資料整理を主導した牟禮による。

毎文舎文庫とは、原田が自身の名前の「敏」にちなみ命名されていた蔵書・資料類で、逝去後、ご遺族のマサ夫人、ご長男の敏丸氏のご厚志により、皇學館大学神道研究所へ寄贈された。内容は、図書（和本・洋本・洋書・逐次刊行物等）・資料・草稿類・写真・録音テープ・その他で構成される。

寄贈は、平成４（1992）年から平成14（2002）年にかけて、計４回に分けて以下の内容でなされた。

### （１）平成４（1992）年８月

和本710点・1,000冊余、洋書類105冊。和本は祭祀・年中行事・民俗を中心とする。神宮皇學館の神社調査部による収集資料であり、戦後に監修した『日本祭礼行事集成』の基になる。洋書は、宗教民族学・宗教社会学・宗教心理学に関するものが中心である。東京帝国大学時代のテキストなども含む。

『原田敏明先生旧蔵　毎文舎文庫目録』（平成８（1996）年）にまとめられている。

（２）平成12（2000）年３月、６月

洋本、逐次刊行物（このうち、洋装本3,871冊）、研究収集資料980点。洋装本の領域は、宗教・神道・民俗・郷土史誌等にわたる。研究収集資料は、覚書や原稿草案、文献の抜書類、実地調査記録などを綴りあわせて、同一規格（19.5×14.5㎝）の表紙をつけて整理したもの。資料は色別ラベルや番号を記して分類・整理されている。

洋装本は、『原田敏明毎文舎文庫蔵書目録』（平成16（2004）年）にまとめられており、皇學館大学附属図書館に収蔵・配架されている。また研究収集資料は、「原田敏明毎文舎文庫研究調査資料目録」（平成16（2004）年）にまとめられている。

（３）平成13（2001）年２月

写真3,709点、写真原簿（台帳）２冊、録音テープ14リール。写真は、昭和11（1936）年～昭和54（1979）年にかけて撮影あるいは収集された。録音テープは、研究会での原田の発表や対談がある。

写真原簿の記載事項は、『原田敏明毎文舎文庫写真目録』（平成16（2004）年、『写真目録』）にまとめられている。その後、國學院大學日本文化研究所と神道研究所の共同研究の成果として「皇學館大学神道研究所所蔵原田敏明毎文社文庫写真資料」（以下、「写真資料データベース」）が平成18（2006）年に公開された[20]。さらに平成19（2007）年に神道研究所より写真も含めた『原田敏明毎文舎文庫写真資料目録』（『写真資料目録』）が刊行されている。

（４）平成14（2002）年９月

書斎の机辺に置いてあったもの。原稿・草稿・覚書など。このうち、原稿については、『宗教　神　祭』の第一編（本編）として刊行されている。

## ３．原田敏明毎文舎文庫写真資料

本稿で分析対象とする写真資料の概要について、『写真目録』『写真資料目録』をもとに整理する。

写真資料の整理は、原田自らが記入、作成した専用の写真原簿（２冊）に基づいている。写真原簿には、受入番号・分類記号・所在地（府県郡市町村字・神社名等）・件名・備考・撮影年月日・受入が記載されている。受入番号は、１～4,120まであるが、そのうち、番号はあるが項目に記載がないもの、記載はあっても写真が存しないもの（22点）、また原簿未記載で存在するもの（47点）等があるため、実際の枚数は3,709点となる。なお、この点数は、『写真目録』と『写真資料目録』で若干の異同がある[21]。本稿では『写真資料目録』の点数に従う。

所在地は、撮影当時の住所のため、その後の市町村合併等による違いがある。件名には写真対象が示されており、続く備考に適宜説明が加えられている。撮影年月日には、昭和11（1936）年１月１日から昭和54（1979）年までの記載がある。年あるいは年月までの記載や、記載のない場合もある。その他、目録の詳細は、『写真目録』『写真資料目録』の凡例を参照いただきたい。

写真資料の特色として、目録を作成した牟禮は、次の３点をあげる[22]。まず写真原簿による撮影対象や撮影年月日についての基本的情報が整っている点である。これら基本的情報が、本資料の二次的分析や活用の可能性を高めている。具体的な一例としては「対象となる民俗事例を現状と比較し、変化を考察するに際して有効[23]」であることをあげる。

次に、撮影対象が早い時期から焦点化されている点である。牟禮は、最初の写真資料の撮影年月日が、昭和11（1936）年１月１日であることから、同時期に有栖川宮記念奨学金を受託して宇野円空、古野清人とともに行った「本邦農耕儀礼の宗教民族学的研究」を契機としていると指摘する。同研究では、宇野が東南アジア、古野が台湾と九州、原田が日本を分担しており、「宮座行事・当屋・オハケ、加えて村の宗教施設である神社・堂・会所等、さらに墓地・墓碑等で全体の７，８割位に及び、関心の主たるありか[24]」とする。

最後に、調査対象地域が近畿を中心にしている点である。この点は、前述の「文化のすり鉢型」理論とも関連する。都道府県別の写真枚数上位は、奈良県(915)、三重県(584)、滋賀県(357)、沖縄県(334)、兵庫県(144)、京都府(135)となっている。全国の分布を地図化してみると、図1となる。北海道と群馬県のみゼロだが、その調査対象地域はほぼ全国に広がっている。その一方で、写真枚数が多い都道府県は、近畿に集中していることを理解できる。

図1　都道府県別写真枚数

## 4、國學院大學・皇學館大学による写真資料研究

本学神道研究所へ毎文舎文庫資料が寄贈されるのと時を同じくして、國學院大學では、平成11（1999）年度より平成17（2005）年度まで文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業を受託し、学術フロンティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」が進められた。同事業は「学内に所蔵されている画像資料についての再生・デジタル化を行うとともに、それぞれの画像について各分野から研究を進めることで学術資料としての位置づけを行

い、史・資料としての体系化」をはかった[25]。その成果の一つとして「國學院大學学術資料データベース（現在は、國學院大學デジタルミュージアムへ移管）」が公開され、「大場磐雄博士写真資料」・「大場磐雄博士資料」・「柴田常恵写真資料」・「折口信夫博士歌舞伎絵葉書資料」・「宮地直一博士写真資料」・「杉山林継博士収蔵資料」・「考古学資料館所蔵縄文土器」・「考古学資料館発掘調査報告書」などを閲覧できる[26]。

果たして、皇學館大学神道研究所も毎文舎文庫の写真資料の存在を踏まえて、平成16（2004）年度より同事業に参画することとなり、平成18（2006）年５月に「写真資料データベース」として公開されるに至った[27]。公開された内容は、『写真目録』の文字データと、デジタル化した写真資料である。暫定的に戦前期撮影分である3,648件が掲載され、そのうち3,555件の画像を閲覧できる。『写真目録』の受入番号や所在地などからも検索でき、資料へのアクセシビリティは大変高い。

ここでは「写真資料データベース」公開の前後に開催された画像資料研究フォーラムのうち、第４回フォーラム「皇學館大学神道研究所原田敏明文庫の資料と活用」（平成16（2004）年）、第７回フォーラム「原田敏明の研究資料と学問」（平成17（2005）年）を取り上げて、毎文舎文庫の写真資料の活用と学術的な価値の位置づけについて確認する。

第４回フォーラムでは、「皇學館大学神道研究所原田敏明文庫の資料と活用」と題して牟禮による資料概要の紹介とその特色が示された。コメンテーターを務めた小川直之と椙山林継からは、それぞれ学問的資料の重要性とともに、両大学の研究連携の可能性について述べられた[28]。写真資料の特色については本稿でも既に触れてきたとおりだが、牟禮は本発表の最後に、毎文舎文庫の課題・問題点として今後の管理活用をあげている。「特に写真資料をどのように活用するか。考えられる方法はスキャナで読み取って、國學院大學のこの学術フロンティアで既に実施されている『柴田常恵写真目録』や『大場磐雄博士写真資料目録』のように、写真と文字情報を付けた目録の作成と、それらのインターネットで公開すること」を提案し[29]、その後、前述のとおり公開されている。

第７回フォーラムでは、「原田敏明の研究資料と学問－國學院大學・皇學館

大学の研究連携にむけて－」を全体テーマとし、宗教学・神道学・歴史学・民俗学の領域から学説の可能性や資料の有用性について議論がなされた。東海大学時代の原田とともに奈良県桜井市の調査へ同行した曽根總雄は、埋葬墓と詣り墓などに象徴される「村の葬制」への原田理論の特色を述べ[30]、前田俊一郎は、その両墓制研究の軌跡から、両墓制の分布や地域差の意味を明確にしようとした点に原田の研究の重要性を指摘した[31]。小川直之は、原田の著述目録から昭和12（1937）年以降のフィールドワークに基づく「部落祭祀」論への移行と、宮座論への展開過程に見る特色を述べた[32]。また、櫻井治男は特に三重県内における祭礼調査資料は、現状調査にとって有効性の高いことと、写真資料とともに、調査ノートとの関係づけが今後の課題であると指摘した。具体的には、調査ノートのうち昭和12（1937）年以降に質問票形式の調査項目をまとめた「神社ヲ中心トシテノ調査」と「三重県調査標目」を紹介する。詳細な項目に原田の研究関心をうかがえるとして、「神社ヲ中心トシテノ調査」では「当屋」「宮座」をあげ、「三重県調査標目」のうち原田の直筆を確認できる「山神」「浅間さん」「獅子」「注連」を示す。また櫻井は、写真資料のうち、三重県内の地域区分を撮影年月日とともに整理しており、「大体、戦前の写真は昭和12年から16年位にかけてのものです。そして、お墓に関するものは戦後がほとんどです。戦後における先生の両墓制の研究、例の両墓制論争がありますが、戦前の写真の存在状況と特性が見えてくる」と述べている[33]。

これまでの毎文舎文庫、とりわけて写真資料をめぐる先行研究や取り組みをまとめると、原田学の学問的価値を前提に、その形成過程をうかがえる一連の資料は、寄贈を受けた神道研究所による丁寧な整理により、詳細な目録化がはかられた。またその作業に携わった関係者により一部資料を用いた原田学形成過程の貴重な考察も加えられている。さらに、写真資料という特色を活かすために、皇學館大学と國學院大學の共同研究によるデジタル化がなされ、インターネット上への一般公開を果たしている。その一方で、あえて課題をあげるなら、先行研究の指摘する「文化のすり鉢型」理論を裏付ける近畿を中心とした調査対象地域の分布は、量的な実証を得ながらも、なお地理空間的な視点による地図化、可視化にはまだ手法的な余地を残している。また、地図化によって「オ

ハケ」や「墓」といった調査対象の地理的あるいは空間的な共通点・相違点などもさらに明らかにできる可能性を含む。

そこで後半は毎文舎文庫写真資料を対象に、その地理的空間性を可視化し、新たな活用の可能性を考察する。

## 5．毎文舎文庫写真資料のGIS分析

### （1）GIS 分析

GISは、地図上の位置に関する情報をキーとして、異なるデータ間の関係性の把握や、分析、新たなデータの作成や更新を容易にするシステムである。平成19（2007）年に成立した地理空間情報活用推進基本法に基づく「基盤地図情報（電子地図上の基準となる位置情報）」の公開（国土地理院）をはじめ、「e-Stat 政府統計の総合窓口」などでは、国勢調査などの位置情報を含む公的データのオープン化が進んでいる[34]。これにより行政や民間事業者などが整備する様々な地理空間情報を効率的に高度に利用することが可能である。

筆者は、これまで多様な社会課題について地域神社への具体的な影響を実証することを目的に GIS 分析を行ってきた。例をあげると、人口減少が地域神社に及ぼす社会構造的な影響を神社周辺人口の増減分析から明らかにした。すなわち、推定神社・推定寺院の半径500ｍバッファー内の推定人口を平成27（2015）年国勢調査の小地域（町丁・字等別単位）人口から面積按分した。その結果、全国の寺社半径500ｍバッファー内推定人口25人以下の推定神社が10,418社（全神社数の12.9％）、推定寺院が7,554寺（全寺院数の10.1％）存在する可能性を指摘した[35]。また、神社周辺の人口（推定神社半径500mバッファー内推定人口）を国土数値情報「500ｍメッシュ別将来推計人口」（分析範囲は、自治体単位の約880倍）の三重県を取り上げて2015年と2050年から面積按分し、35年後の人口増減率の分析を試みた。その結果、2015年から2050年で最高人口が5007.15人から4686.65人へ減少した。また神社周辺人口別に神社数を比較すると、300人より大きい神社数が減少し、300人以下が増加傾向（25-50人は微減）となり、25人以下（０含む）が48社（5.8％）増えた。また2015年を基準に2050

年の増減率を７区分で分類すると－39％以上－20％以下が295社（35.8％）と最多で０％以下（人口減）となるのは、90.3％となり、そのうち－100％以上－80％以下が36社（4.4％）となった。最後に増減率を３区分し神社密度をヒートマップ化したところ、－60％以下は鳥羽以南の海岸沿いと伊賀地域に集中し、－60％より大きい神社は北勢中勢地域に集中した。そのうち、０％より大きい神社は北勢の一部のみとなった[36]。

さらに、画像と地図を組み合わせた取り組みとして、「山の神アプリ」の開発・実装に関わってきた（図２）。同アプリは、明和町と皇學館大学による伝統文化プロジェクト（平成29（2017）年度～平成30（2018）年度）によるもので、町内に残存する山の神約40基の所在地住所および画像を現地調査で収集し、マッピングしたデータをもとにArcGIS Onlineのストーリーマップを使って閲覧・活用できるアプリケーションである。把握できていない残りの山の神について情報を追加・更新しながら、地元小学生・中学生の学習教材や、観光コンテンツとして新たなまち歩きコースなどへの活用も期待されている[37]。なお、皇學館大学におけるGISの活用については、その導入に貢献した桐村喬がまとめているのであわせて参照されたい[38]。

図２　山の神アプリ

（２）分析対象

本稿で対象とするのは、『写真目録』『写真資料目録』のうち、都道府県別で２番目に写真数の多い三重県を取り上げる。三重県内の写真数は、『写真目録』『写真資料目録』によると584件になる。そのうち、「所在地」と「撮影年月日」

が記載されている552件を抽出し、「所在地」を現在の市町村住所に編集した。次に、現在の市町村住所を東京大学空間情報科学研究センター提供のCSVアドレスマッチングサービス「一般公開（位置参照情報による街区レベル）」を利用して緯度経度に変換した[39]。結果について変換の信頼度である「iConf」と、変換された住所のレベルを表す「iLvl」から妥当性を確認したところ[40]、「iLvl」が「３」すなわち市町村レベルでとどまったデータが８件あった。それぞれ内容を確認すると、そもそも写真原簿の「所在地」が市町村レベルまでしか書かれておらず、場所を類推する情報もなかったことから、このデータを除外し合計で544件となった。これを位置情報付き写真目録データとする。なお、対象としたデータは、『写真目録』『写真資料目録』を編集した牟禮より『写真目録』作成時エクセルデータの提供を受けた。

### （３）分析結果

（２）で抽出した544件の位置情報付き写真目録データを、ESRI社のArcGIS Proを使って、写真ポイントと市町村別写真数を地図化した（図３）。伊勢市を中心とした伊勢志摩地域と、伊賀地域で撮影された写真が多い。

次に、撮影年別の写真数は、図４となる。三重県内は、圧倒的に昭和12（1937）年から昭和16（1941）年にかけての戦前期に撮影された写真が多く79.8％を占める。また撮影年月日のうち、月までの記載がある490件について月別の写真数を見ると、図５となる。２月と10月が突出しており、49.8％を占める。

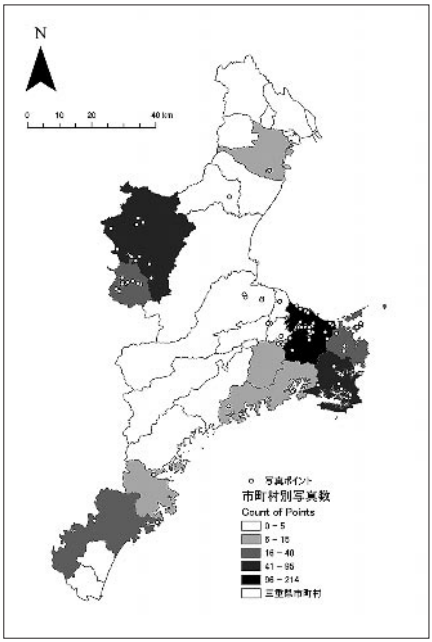



図３　写真ポイントと市町村別写真枚数

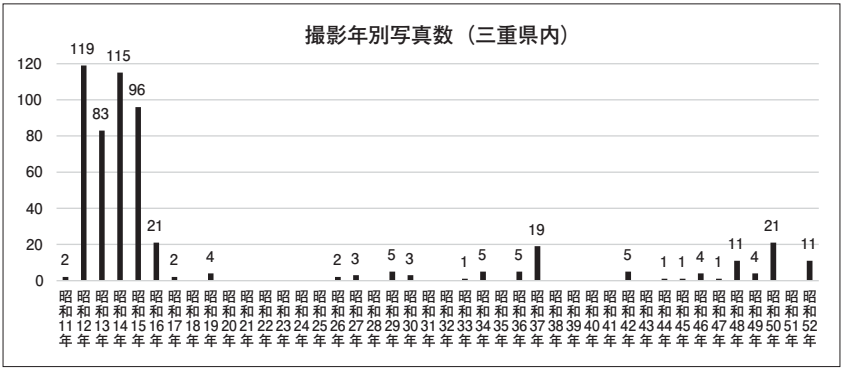



図４　撮影年別写真数（544件）

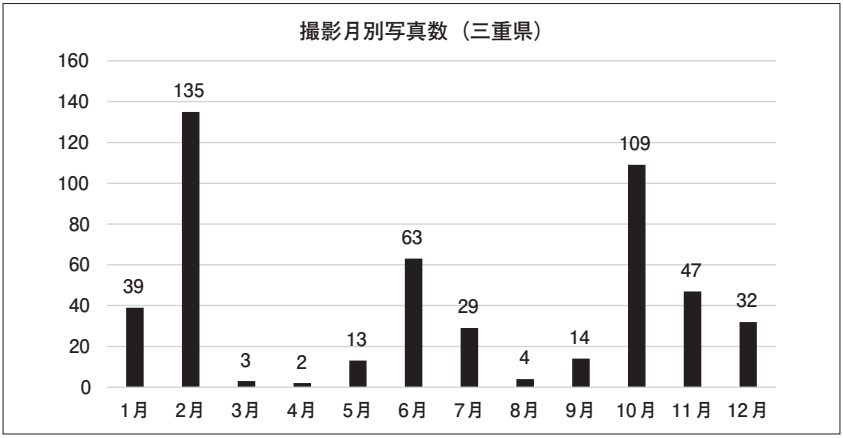
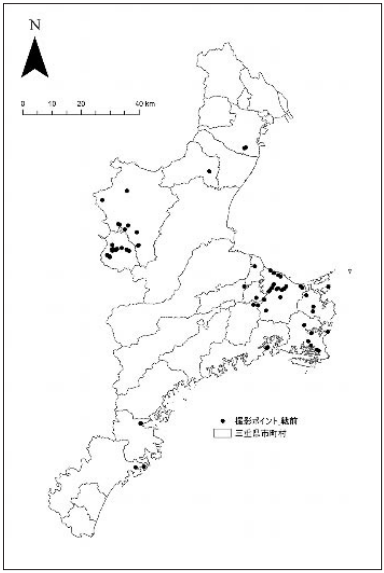



図５　撮影月別写真数（490件）

次に、年別の写真数を、戦前と戦後で分けて地図化すると、図６・７である。伊勢志摩地域と伊賀地域への集中にそれほど変わりは見られない。ところが、月別の写真数を２月と10月分で地図化すると図８・９となる。明らかに２月は伊勢志摩地域が多く、10月は伊賀地域が多い。



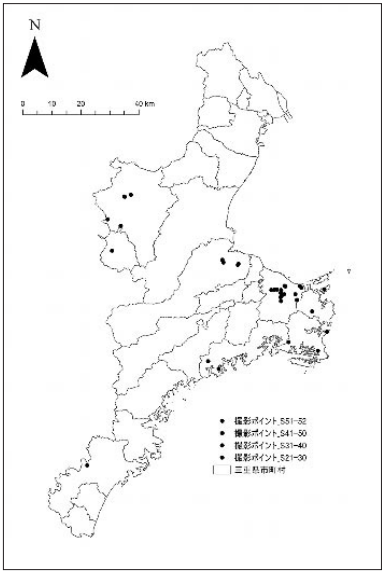
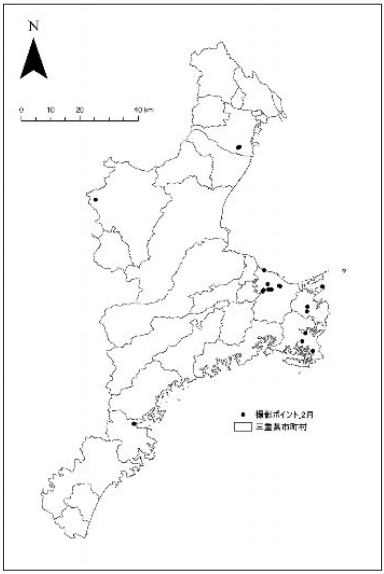




図６・７　戦前撮影写真ポイント・戦後撮影写真ポイント



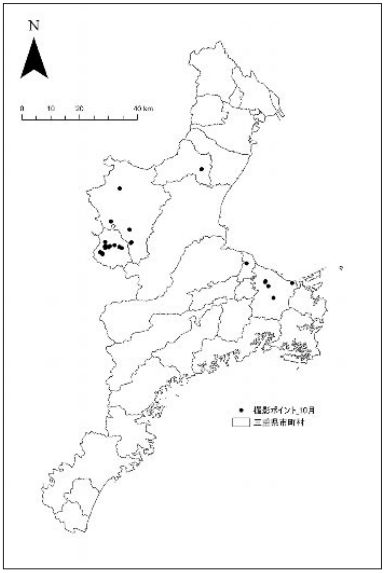




図８・９　2月撮影写真ポイント・10月撮影写真ポイント

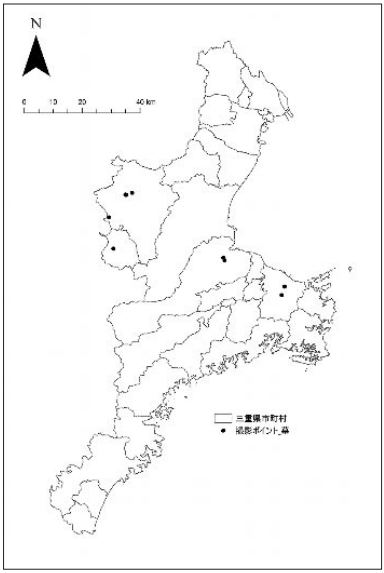



図10 「墓」を件名に含む写真ポイント

図11 「オハケ」を件名に含む写真ポイント

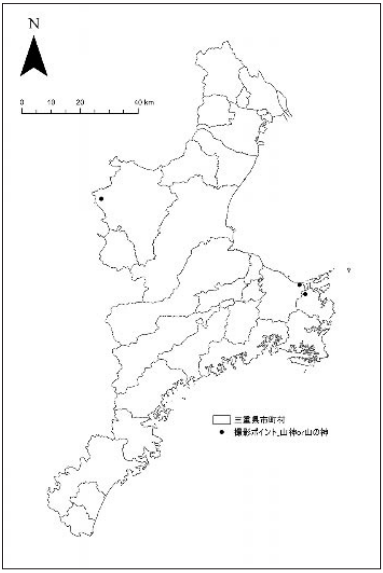



図12 「山神・山の神」を件名に含む写真ポイント

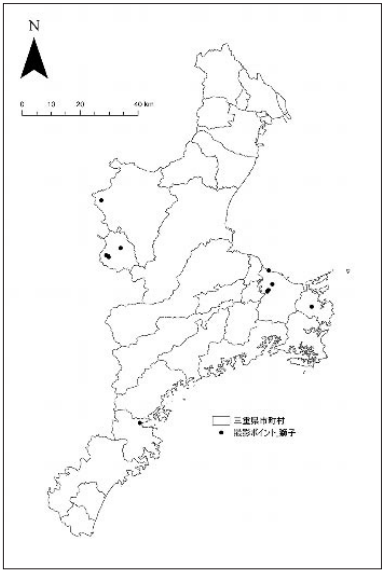



図13 「獅子」を件名に含む写真ポイント

位置情報付き写真目録データの「件名」から「墓」「オハケ」「山神・山の神」「獅子」をテキストに含む属性分析を行ったところ、図10・11・12・13となった。「墓」「オハケ」は、原田の研究対象として先行研究でも特筆されており、「山神・山の神」「獅子」は、原田の調査ノートにある「三重県調査標目」の直筆項目として抽出した。

まず「墓」を含む写真は11枚あり、現在の伊賀市（４枚）・名張市（１枚）・伊勢市（３枚）・松阪市（３枚）に分布する。撮影年月日は、戦前が１枚のみで、その他は戦後の撮影であった。

「オハケ」を含む写真は22枚あり、現在の伊勢市が19枚でほとんどを占め、３枚のみ度会郡度会町に分布する。撮影年月日は、すべて戦前の撮影であった。

「山神・山の神」を含む写真は13枚あり、現在の伊賀市（２枚）・伊勢市（２枚）・鳥羽市（９枚）に分布する。撮影年月日は、戦前11枚に対して戦後は２枚のみであった。

「獅子」を含む写真は27枚あり、伊賀市（３枚）・名張市（７枚）・伊勢市（15枚）・鳥羽市（１枚）・尾鷲市（１枚）に分布する。撮影年月日は、すべて戦前の撮影であった。

| 富士浅間講系 | | 写真枚数 |
|---|---|---|
| 飯南郡 | 松尾村立野 | |
| | 伊勢寺村 | |
| | 櫛田村 | |
| | 漕代村月田 | |
| 多気郡 | 津田村井内林 | |
| | 佐奈村前村 | |
| | 佐奈村平谷 | |
| | 五佐奈 | |
| 度会郡 | 内城田村大野木 | 1 |
| | 御薗村高向 | 4 |
| | 南海村礫 | |

| 氏神祭系 | | 写真枚数 |
|---|---|---|
| 度会郡 | 御薗村高向 | 9 |
| | 伊勢市浜郷村通 | 4 |
| 志摩郡 | 鳥羽町字堅神 | |

図14　『村の祭と聖なるもの』に取り上げられている三重県内オハケ

### （4）考察

GISを用いた分析結果から若干の考察を加えたい。まず、三重県内でも伊勢志摩地域と伊賀地域の写真数の多さは、原田の研究関心をあらためてうかがえる。両地域での調査が、戦前を中心としながらも戦後にかけて変わらず継続していた。しかしながら調査月は、2月の伊勢志摩地域に対して、10月の伊賀地域と分かれており、時期的な関心に違いを見ることができる。そこで2月の「件名」を概観すると、「弓行事」「山神」「獅子舞」「湯立神事」など伊勢志摩地域を代表する冬の行事が目に留まる。一方で、10月は「当屋」「御旅所」「神幸」「仮屋」「獅子舞」など伊賀地域の秋祭りを特徴付ける件名が目立つ。伊勢湾や太平洋を近くにする伊勢志摩地域に対して、山間農村部の伊賀地域という地理的対比とともに、伊勢神宮を中心とした伊勢志摩地域と、畿内により近い伊賀地域との文化的対比という側面も推測できる。また当時、伊勢を拠点とした原田にとって、昭和6（1931）年に宇治山田と上本町間をつないだ大阪電気軌道および参宮急行鉄道による移動利便性も影響したのだろうか。

また、「件名」から特定のテキストを抽出した結果を見ると、ほとんどが写真資料全体の傾向と同様に戦前の撮影であった。国産カメラ開発が1930年代であることを踏まえると、原田の写真を用いた調査は先進的だったと思われる。その中で「オハケ」は、原田の特徴的な調査対象の一つであり、当時の写真記録はそれだけでも貴重である。そこで写真資料の研究成果への反映を見るために『村の祭と聖なるもの』で取り上げられている三重県内の事例をまとめると図14となる[41]。必ずしも写真資料が取り上げられている事例を網羅していない。例えば飯南郡の事例は、脚注に「昭和17年3月16日調[42]」と原田自身の調査によるものの、『写真目録』『写真資料目録』に同日同場所を撮影年月日とする写真はない[43]。このことは、写真資料が当然ながら原田の全調査範囲に及んでいるわけでなく、撮影の意図や基準などについてはさらなる分析が求められる。また、「墓」は11枚中10枚が戦後であった。この点は既に櫻井治男も指摘しているが[44]、そのうち伊勢志摩地域が3枚、伊賀地域が5枚であることから戦後の両墓制研究においても両地域が調査対象として継続されていたことを確認できる。それでも戦前戦後の写真資料の量的偏りの要因は課題として残る。

最後に、GISによる分析の有効性についても確認しておく。『写真目録』『写真資料目録』の「所在地」「撮影年月日」などの詳細な情報があることによって、地図化による分析可能性を高めている。今回は三重県に限定したが、今後、奈良県をはじめとした写真数の多い都道府県へと分析を広げていくことで、さらに原田学の研究関心の解明を期待できる。

その一方で、今後の課題として「所在地」を現在の住所へ編集する作業があげられる。戦前戦後の市町村合併による住所変更を反映することは今のところ手作業のため、この過程での精度を保持する必要がある。改善策として例えば、ある程度の精度であっても紹介した「山の神アプリ」のように、アプリケーションを作成し、学生との現地調査や公開調査を行うことで、GPSを活用した位置補正も考えられる。さらに、現地での撮影画像と原田の写真との比較も可能である。

また、本稿ではあくまでも写真資料の位置情報に限定した分析であるため、繰り返すが原田の調査そのものや調査結果のすべてを反映できているわけではない。この点は、先行研究で指摘されているとおり、調査ノートをはじめ他資料との連動した考察が求められる。

## おわりに

本稿では、本学が寄贈を受けた原田敏明毎文舎文庫のうち、写真資料に付随する「所在地」と「撮影年月日」をもとに、位置情報付き写真目録データを作成し、原田学の総体的諸資料群を活用したGISによる分析可能性を提示した。分析結果は、先行研究をある程度補完でき、地図化することで地理空間的な特徴を一部把握できた。しかしながら、今回は、試論とはいえ写真資料の位置情報による分析にとどまっている。今後は、位置情報の精度向上と、写真そのものの現在地や現在の様子との比較も視野に入れた「毎文舎文庫写真資料アプリ（仮称）」を開発し、調査ノートなど関係資料を踏まえつつ、学生とともに原田の足跡をたどることで、現地調査による実証的な原田学の継承へ精進したい。

## 注

1）原田の後には、細川敏太郎（大正９（1920）年卒・本科第29回）、井上頼寿・小島鉦作（大正12（1923）年・本科第32回）など、宗教学・民俗学や歴史学分野での活躍者がいる。

2）『皇學館大學神道研究所所報』（67、1-12頁）所収。

3）本学での原田敏明との学問的なつながりを便宜的に区分すると、第１世代として西川順土や櫻井勝之進など戦前からの直接的な関係があり、戦後の非常勤講師時代に受講した牟禮仁や櫻井治男などが第2世代ととらえられる。毎文舎文庫が、寄贈当時に神道研究所専任所員であった牟禮を中心にとりまとめられていることなどからも、これまでの原田学は、直接の教えを受けた第1～2世代によって整理・構築されてきたといえる。

4）「この人－板井清直」『中外日報』平成３（1991）年１月９日号。（皇學館百二十周年記念誌編纂委員会編『皇學館百二十周年記念誌－群像と回顧・展望－』学校法人皇學館、平成14（2002）年、279～280頁に再録。）

5）昭和40年度の「日本宗教史」は、神職課程選択必修科目として4年生が該当学年であった（櫻井治男「原田敏明の祭祀・祭礼研究について」注25同書、119-141頁）。

6）ヨーゼフ・クライナー「原田敏明」『阿蘇に見た日本－ヨーロッパの日本研究とヴィーん大学阿蘇調査』一の宮町、平成17（2005）年、140頁。

7）板井正斉「人物コラム③原田敏明」『三重県史民俗編』三重県、平成24（2012）年、233頁。板井正斉「原田敏明と肥後和男の距離：『社会と伝承』を媒介にして」（京都大学人文科学研究所共同研究「日本宗教史像の再構築」第７回研究会ワークショップ「宮座をめぐる冒険　肥後和男『宮座の研究』とその周辺」（平成27（2015）年３月15日）での口頭発表）。

8）西川順土「原田敏明」『悠久』30、昭和62（1987）年。小島鉦作「原田敏明先生を憶う」『館友』153、昭和58（1983）年。櫻井勝之進「退考窟から町田城まで－原田敏明先生－」『館友』153、昭和58（1983）年。森安仁「原田先生に学ぶ」『館友』153、昭和58（1983）年。以上は、皇學館百二十周年記念誌編纂委員会編『皇學館百二十周年記念誌－群像と回顧・展望－』（学校法人皇學館、平成14（2002）年、139～145頁）に再録されている。なお、『館友』153は、原田先生追悼号である。

9）詳細な年譜として、生前未刊行の元原稿をまとめた原田敏明『宗教　神　祭』（岩田書院、平成16（2004）年）に、「原田敏明略年譜」（403～406頁）がある。同年譜

の最後には次のように追記がある。「本年譜は『湘南史学』7・8合併号（東海大学大学院日本史学友会、1986年12月）掲載の「原田先生略年譜」にもとづき、若干、表記をあらため、また事項を補完したうえ、御長男原田敏丸氏にご確認いただいたものである。なお「略年譜」には、次のような経緯が付記されている。本年譜は昭和21年4月まで故原田敏明先生夫人マサ氏、御子息原田敏丸氏、同敏治氏の御教示と原田先生の手による略歴書をもとに作成し、以下を東海大学大学院日本史学友会の調査、記録にもとづいて作成した。そのため、この前後で表現が異なっていることを御了承頂きたい。」

10）牟禮仁「原田敏明著述目録」、原田注9同書、407～420頁。

11）住谷一彦「原田敏明『宮座』論の普遍性と特殊性」。ヨーゼフ・クライナー「日本文化研究と原田敏明の学説」。岡田重精「「原田学」における「日本古代宗教」論」。石井研士「原田敏明の宗教社会学－宗教と社会の一般理論を求めて－」。早川万年「原田敏明の視座－古代社会論と古典の位相－」。櫻井勝之進「神宮に関する四つの新見解」。いずれも原田注9同書、291～395頁。同書を編集した牟禮仁は編集後記に「第二編原田学研究には、先生に直接お教えを受けその学風に親炙し、あるいは関心を寄せる六人の研究者の方々に、それぞれの分野からする原田学の特色・意義・課題等に主眼をおいた研究論説を執筆していただいた。」（原田注9同書、428頁）とその趣旨を記している。

12）石井研士「原田敏明の宗教社会学－宗教と社会の一般理論を求めて－」、原田注9同書、358～375頁。

13）住谷一彦「原田敏明「宮座」論の普遍性と特殊性」、原田注9同書、292頁。

14）住谷一彦「原田敏明「宮座」論の普遍性と特殊性」、原田注9同書、326頁。

15）福田アジオ、新谷尚紀他編『日本民俗大辞典』上、吉川弘文館、平成11（1999）年、277～278頁。

16）初出は、『神道研究』3-1、昭和17（1942）年（牟禮注10同書より確認）。

17）初出は、『帝国学士院紀事』2-1、昭和18（1943）年（牟禮注10同書より確認）。

18）原田注9同書、118～119頁。初出は、大塚民俗学会編『日本民俗辞典』弘文堂、昭和47（1972）年。

19）原田敏明『村の祭と聖なるもの』昭和55（1980）年、中央公論社、243頁。

20）文部省（当時）私立大学学術高度化推進事業（学術フロンティア推進事業）として、國學院大學が平成11（1999）年度より実施した「学術フロンティア構想　劣化

画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクト（研究代表者：國學院大學日本文化研究所所長杉山林継教授）に、平成17（2005）年度より皇學館大学神道研究所が参画して実現した。現在は、國學院大學デジタルミュージアムに公開されている。（https://d-museum.kokugakuin.ac.jp/database/，令和３（2021）年９月12日閲覧。）

21）『原田敏明毎文舎文庫写真目録』（平成16（2004）年）の凡例には、「受入番号欄の各項目にはナンバリングが付され（末尾は手書）、その番号は4,120までとなっている。それらのうち番号はあるが項目に記載がないもの、記載はあっても写真が存しないもの（９点）等、また台帳未記載で存在するもの等がある。これらを台帳と照合し確認すると、実際に存する枚数は、3,665点となる。（なお、同一写真で複数あるものは含まない。）」とある。

22）牟禮仁「解説」『原田敏明毎文舎文庫写真資料目録』、平成19（2007）年、皇學館大学神道研究所、ｖ－vi頁。

23）牟禮注22同書、ｖ頁。

24）牟禮注22同書、vi頁。

25）小川直之「原田敏明の研究資料と学問」國學院大學日本文化研究所学術フロンティア推進事業「劣化画像の再生活用と資料化に関する基礎的研究」プロジェクト編『國學院大學学術フロンティア事業研究報告　人文科学と画像資料研究』第３集、國學院大學日本文化研究所、109-111頁。

26）https://d-museum.kokugakuin.ac.jp/，令和3（2021）年９月20日閲覧。

27）これを契機として、皇學館大学・國學院大學では、平成18年４月に教育・学術研究交流協定を締結している。

28）小川注25同書、109-111頁。

29）牟禮仁「皇學館大学神道研究所原田敏明毎文舎文庫の資料と活用」注25同書、113-117頁。

30）曽根總雄「村の葬制」注25同書、143-149頁。

31）前田俊一郎「原田敏明の『両墓制』論をめぐって」注25同書、151-161頁。

32）小川直之「村落祭祀論をめぐって」注25同書、163-171頁。

33）櫻井治男「原田敏明の祭祀・祭礼研究について」注25同書、119-141頁。

34）例えば、「基盤地図情報ダウンロードサービス」（https://fgd.gsi.go.jp/download/menu.php，令和３（2021）年９月20日閲覧）。「e-Stat 政府統計の総合窓口」（https://

www.e-stat.go.jp/，令和３（2021）年９月20日閲覧）等。

35）板井正斉「「推定宗教法人データ」による寺社半径500ｍ内推定人口のGIS分析」『宗教と社会』25、平成31（2019）年、127-134頁。

36）板井正斉「三重県における神社周辺人口の将来増減分析－「500ｍメッシュ別将来推計人口」を用いて－」『皇學館大学紀要』59、令和３（2021）年、1-20頁。

37）「山の神アプリ」（https://www.arcgis.com/home/item.html?id=a0fdcf2f32ca46d59c51d0b8ce4d4c02，令和３（2021）年９月20日閲覧）。

38）桐村喬「皇學館大学におけるGIS教育の展開と実践」『皇學館大学紀要』59、令和３（2021）年、285-265頁。

39）「位置参照技術を用いたツールとユーティリティ」（https://geocode.csis.u-tokyo.ac.jp/，令和３（2021）年９月20日閲覧）。

40）「iConf, iLvl の意味」（https://geocode.csis.u-tokyo.ac.jp/home/csv-admatch/faq/#iconfilvl，令和３（2021）年９月20日閲覧）。

41）原田注19同書、250-251頁。

42）原田注19同書、254頁。

43）しかしながら、昭和17年３月16日を撮影年月日とする「滋賀県神崎郡御薗村大字神田 川桁御阿辺神社」（現滋賀県八日市市神田町）での写真資料があり（受入番号1571-1581）、今後、調査ノートなどを含めて精査の余地がある。

44）櫻井治男「原田敏明の祭祀・祭礼研究について」注25同書、125頁。